

理学療法分科会主催

第1回研修会

平成 21 年 1 月 18 日、四條畷学園大学リハビリテーション学舎において理学療法分科会主催の第 1 回研修会が開催されました。

講師には、大阪電気通信大学医療福祉工学部理学療法学科で教壇に立たれている小柳磨毅先生をお迎えして「スポーツ障害の理学療法とその応用」というテーマで講演をして頂きました。

当日は新春とは申しながらまだ堪えがたい寒さが続き、小雨が降る中 1 期生から 4 期生の卒業生、教員を含め総勢 99 名の先生方が参加され、とても充実した研修会となりました。



講師：小柳 磨毅 先生（大阪電気通信大学）

講演では、スポーツ傷害を **mobility**: ストレッチング、**stability**: 筋力強化トレーニング、**coordination**: 協調性の 3 つの観点から代表的な疾患について研究報告を含めて講演頂きました。

「投球傷害」では、投球動作における最終域での前方への牽引によって後方の疼痛の発生が考えられること。投球動作を三次元動作解析装置により得られたデータに筋骨格を当てはめて動作を再現したデータを用いることでアスリート本人へのフィードバックも行いやすくなり、言葉だけでなく画像を用いて他職種、トレーナーへの指導を分かりやすく的確に行いチームとして選手をサポートにしていけること。これからの理学療法士は選手だけでなく生涯スポーツといった地域での社会貢献にも活躍の場面が広がってきており期待に応えるだけの知識、技術を持っていると売り込んでいくチャンスであるとのことでした。「ランナー膝」では、前十字靭帯再建後の加速リハについて、移植腱への力学ストレスにより大腿骨孔に隙間が発生する可能性があり、1 週間固定群と 2 週間固定群において 12 週間後の関節可動域には、有意差は見られず、2 週間の固定が安全性から考えると良いのではないかとのことでした。

「**enthesopathy**(腱靭帯付着部症)」では、腱靭帯移行部では 4 段階の組織変化によって骨端に付着しており靭帯の圧迫ストレスによっておこる滑膜炎と靭帯の伸張ストレスによっておこる組織炎の二つの病態が含まれており状態をよく確認して治療手技の選択を行う必要があるとのことでした。また習慣性脱臼、ACL 損傷、PCL 損傷での **Bridge** 動作を用いてのトレーニングのポイントを、図や X 線を使用して骨の動きを目視化した映像などを用いて説明して下さいました。

最新の研究や機器を利用して得られた画像、映像を随時織り交ぜながら講義頂き、とても興味深く今後の臨床において考えることが多い内容で 90 分という時間があっという間に過ぎてしまいました。また最後にスキルアップの研修会として、電気通信大で行われているワークショップの案内がありました。

末筆になりましたが、今回講演していただきました小柳先生をはじめ、研修会の準備をしていただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。

(四條畷学園大学同窓会 理学療法分科会 会誌担当)